祇園祭の役行者山に伝来する唐子嬉遊図の綴織の水引をめぐって

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 京都市立芸術大学美術学部 公開日: 2022-03-23 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 吉田, 雅子 メールアドレス: 所属:
URL	https://kcua.repo.nii.ac.jp/records/403

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 4.0 International License.

論 文 *ARTICLE*

祇園祭の役行者山に伝来する唐子嬉遊図の綴織の水引をめぐって

The Tapestry of *Karako-kiyūzu* (Chinese Children at Play) on the *Ennogyōja-yama* Float of the Gion Festival

Masako Yoshida 吉田　雅子

はじめに

祇園祭の役行者山には、日本製の綴織が江戸時代にどのように成立したかを研究する上で大変重要な作品が伝来している。江戸時代の史料の中で文化年間(1804-1817)に日本人の西山勘七によって織り出されたと記されている綴織に該当すると、この作は長らく伝えられてきた。しかしながら、本作に関して本格的に詳細な調査が行われることは今までなかった。

本作は水引（みずひき）と称される掛物であるため、まずここで水引とは何か簡単に述べておく。水引とは山鉾の上部にかける細長い装飾布（図 1-a、b）で、通常は山鉾をぐるりと囲むように 4 枚かけられる。祇園祭ではこれらを山鉾の位置に準じて東西南北で表すことが多い。役行者山の水引の場合は、西側にかけるもの（1 と略称）（図 2)、東側にかけるもの（2 と略称）（図 1-b、図 3)、南側にかけるもの（3 と略称）（図 1-a、図 4)、北側にかけるもの（4 と略称）の計 4 枚から構成されている。

このうち 1・2・3 の水引は、中国の子供（唐子）が楽しく遊ぶ様子が表された一枚の綴織でできている。これに対して 4 の水引は、中心に龍が表された紋織物、その左右に 10 枚の綴織の断片が接ぎ合わされており、1・2・3 とは明らかにつくりが異なっている[1]。祇園祭では年月が経って掛物が傷んだ場合、別の品の断片を縫い合わせて仕立て直すことが多い。このような祭礼品特有の事情を勘案すると、4 の水引に接ぎ合わされている綴織の裂片は、後世に組み込まれた別の作品の断片と見て間違いないであろう。そこで、本稿では 4 を除き、1・2・3 の水引を考察の対象とする。

昭和 45 年（1970）に、役行者山のこの水引に関して解説文が記された。その中で、1 は和様、2・3 は唐様であるとの推定がなされた[2]。ここで言う和様・唐様が日本的・中国的という意味なのか、あるいは日本製・中国製という意味なのか、文章を読む限りでははっきりしない。また、この解説は数行に留まっており、なぜ一方が和洋で、もう一方が唐様と思われるのかといった理由は記されていない。だが、昭和 45 年の時点で 1 は日本的（または日本製)、2･3 は中国的（または中国製）とみるむきがあったことは否めない。

このような見方とは食い違い、後に詳述するように、1 と 2 は似ており、3 はそれらとは少し異なると感じる観者

図 1　役行者山、a は南の水引（水引 3)、b は東の水引（水引 2）

図2　西の水引（水引1）、役行者山

図3　東の水引（水引2）、役行者山

図4　南の水引（水引3）、役行者山

が多いだろう。ここにおいて、筆者の心にいくつかの「問い」が湧き上がってくる。水引は東西南北の4枚が一組、あるいは東西または南北の2枚が一組として制作される場合が多い。1・2・3のうち当初から組物だったのは、いったいどれとどれなのだろうか。また、これらの水引は日本製なのだろうか、中国製なのだろうか。そして、いったいどの品が西山勘七の作なのだろうか。

江戸時代の綴織は、制作者が不明であるか、あるいは名前はわかるものの、作者に関する情報がほとんどないという状況にある。そのような中で、本作は制作者に関する情報が詳しく記録されている極めて貴重な作といえる。そこで本稿では、1・2・3が 日本と中国のどちらで織られたものなのか、当初から組物だったのはどの品か、勘七が作った品を判別できるのか否かという難問に向き合い、可能な限り考えを巡らせてみたい。

以下まず、西山勘七に関する一次史料の内容を確認し、次に表現された図様、さらに綴織の材質や組織を検討してゆく。そしてそれらの結果を勘案しながら、先述した3つの「問い」に対して、現在可能な限り答えを引き出してゆきたいと思う。

なお、祇園祭には「鉾」と「山」がある。鉾も山も山車（だし）の一種だが、祇園祭の鉾は山車の上に鉾がついており、山の場合は松などの常緑樹が用いられる。役行者はこのうちの「山」にあたり、本稿で山と記す場合は、山車としての山を意味することをここに申し添えておく。

1　一次史料の記載

この水引に関する詳しい記載が、『増補祇園会細記』に見られる。藤田吉右衛門貞栄が記したこの文書は、凡例に文化9年（1812）、奥書に文化11年（1814）の年紀がある。貞栄はこの水引が伝来する役行者町の住人で、他の山鉾町に比べると自身の町内の品に関しては、特に詳しい記録を残している。この文書の役行者山の錺附の条に、以下の記載がある[3]。

水引〈地をり綴錦、もやう唐子あそび、此水引綴錦

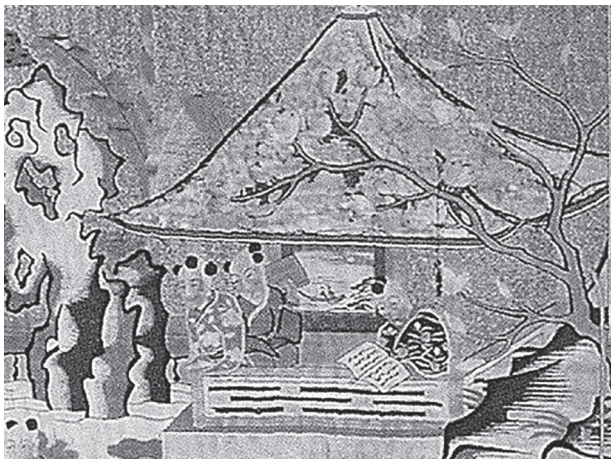

図5　堂宇の中の唐子（書を読む）、水引1

図6　堂宇の中の唐子、水引3

を織たる人ハ西山勘七と称して讃岐国多度郡粟嶋（タトコホリアハシマ）という所の産（サン）なり。幼年の頃より当町内鍵屋嘉兵衛方召仕はれしが天性機織の業を好ミけるに、十四五才の頃京師西陣なる高機（タカハタ）といふものを見てより工夫をなし、ついに綴錦を我朝にて始て織出せし人なり。夫より古郷にかへり益綴錦ををり出し、今文化八年末六月迄に此水引の綴錦を織いたせし也。〉

・割書は＜　＞内、原ルビは（　）内に記す

この文書の凡例の条に、「地をり」と記されているものは、近頃京都において織り出された綴錦であるとの旨が述べられている。綴錦とは今日言うところの綴織であることから、この文の冒頭で、役行者山にある唐子遊の文様の綴織の水引は、日本製であると述べられていることがわかる。そして、これを織ったのは西山勘七であり、勘七は讃岐の国から京都の役行者山の町内の鍵屋に奉公したこと、京都の西陣の高機を見て工夫をこらし、綴織を日本で初めて織り出したこと、後になって讃岐の国に帰ってますます綴織を織り、文化8年（1811）の6月までにこの綴織の水引を織ったことが記されている。この記録によると日本で綴綿を初めて織ったのは西山勘七で、その時期は文化8年以前となるが、それがいつかは明記されていない。日本で綴綿を初めて織ったのが西山勘七かどうかは、他の史料と付き合わせて更に検証する必要があり、本稿はそれを目的とするものではないためここではこれ以上言及しないが[4]、文化8年6月までに西山勘七によって織られた綴織の水引が文化11年の時点で役行者山にあったことは、この『増補祇園会細記』の記載から確実である。

2　水引の主題、モティーフ、表現様式

次に、この『増補祇園会細記』の記載に該当するとされてきた、役行者山に伝来する唐子嬉遊図の綴織の水引をみてゆきたい。先述したように、ここで検討対象となる水引は1・2・3の3枚である。その綴織の大きさは、1は縦57cmで横266cm、2も縦57cmで横266cm、3は縦57cmで横207cmである。この横幅の違いは、役行者の山の大きさに準じている。

これらの水引の主題は中国で形成されたもので、祇園祭では「唐子嬉遊図」「百子嬉遊図」と称されてきた。男系社会の中国では男児が生まれ、元気に育ち、家系が繁栄することが強く望まれた。そのような願いを背景に、多くの男児が元気に遊ぶ姿が表現されている。祇園祭は周知の通り疫病退散の行事として始まったもので、命が絶えやすい子供の健やかな成長を願ってこの主題が選ばれたことは想像に難くない。

先述したように1・2・3の水引の第一印象として、1・2は似ているが、3は1・2とは何か違うと感じる。そのような印象を受ける理由は何かと考えてみると、まず3（図4）は、凹凸が誇張された奇妙な形の紺色の岩が各所に配され、それらの色や形が画面の中で際立っており、1・2（図2・3）とは異なっている。そしてよく見ると、唐子の表現もやや異なっていることに気づく。たとえば1の堂宇の中にいる唐子は、堂宇の中にゆったりとおさまっており、唐子の周囲にもかなり空間がある（図5）。だが、3では、唐子が大きく表され、堂宇の中でひしめきあっているかのようである（図6）。3の唐子は1や2よりも一回り大きく、プロポーションを見ると頭部が大きめで、丸顔が多い。このような違いがあるため、1・2は一つの組物で、3は1・2とは別に制作された品ではないかという疑念が湧く。

そこで次に、それぞれの水引に配されているモティー

図7　碁を打つ、水引1

図8　画を鑑賞する、水引2

図9　画を鑑賞する、水引3

図10　琴を奏でる（補子がついた衣を着用）、水引3

フを見てゆきたい。1には、右から左へ、以下を行う男児たちが表されている。書を読む（図5）、行進する、碁を打つ（図7）、蹴鞠をする、凧を揚げる、カエルと遊ぶ、蓮の花をとる。また2には、以下が入っている。香をきく、蝶を追う、画を鑑賞する（図8）、馬のおもちゃで遊ぶ、魚や蓮の花をとる、音楽を奏でる。そして3には、以下が入っている。画を描いて鑑賞する（図9）、獅子舞をする、琴を奏でる（図10）、麒麟に乗る、孔雀の羽で遊ぶ、釣りをする。

以上挙げたものうち、下線を引いたものは、いわゆる「琴棋書画」に関連していることは偶然ではない。中国の唐子嬉遊図において、古い時代には唐子が無邪気に遊ぶ姿が描かれていたが、明末清初になると唐子嬉遊図のモティーフにいくつかの変化が現れたことが指摘されている。その一つとして、男児がただ楽しく遊ぶだけではなく、子供が官僚として立身出世することを希求する要素が含まれるようになったことがあげられる[5]。科挙に受かって官僚になり、立身出世して家系が繁栄することは、中国の多くの人々の願いであった。中国の官僚は文人でもあったため、文人の4つの基本的素養を表した琴棋書画が組み込まれるようになったのである。

なお、1には「棋」と「書」、2には「画」、3には「琴」と「画」の主題が配されており、2と3で「画」の主題が重複していることは奇妙である。冒頭で述べたように、水引は4枚が一組として制作される場合が多い。あるいは、東西または南北の2枚が一組になることもある。一つの組み物の場合、同じ主題が重複して描かれることは通常ないため、当初2と3は同じ組み物ではなく、別の品として作られた可能性がうかがわれる。

次に、それぞれの水引のモティーフを、さらに詳しく見てゆきたい。まず、立身出世に関する表現に着目して見てゆくと、男児の中の幾人かは、子供の服ではなく、官吏のような服を着ていることに気づく。1には、二人の子供に持ち上げられて行進する男児が表されている（図11）。この男児は冠をかぶり、八宝の一つである「書」の文様が波間に浮かぶ図柄の衣を着ている[6]。そして後方にいる子供がこの男児に天蓋をかざし、この男児は位が高いことを示唆している。波間に八宝がちりばめられたこのような図柄は官吏の袍に用いられることが多く、この男児は出世した官吏の役を遊びながら演じているのであ

図 11　官吏の服を着て行進する、水引 1

図 12　おもちゃの馬に跨がって行進する、水引 2

図 13　麒麟送子、水引 3

図 14　ガマ蛙と遊ぶ（劉海）、水引 1

る。

また、3 の琴を弾く男児（図 10）は、胸に鳥文様の補子のついた服を着用している。補子とは中国の官吏が自身の位階を表すために胸につけた記章で、鳥の種類によってその位階がわかるようになっていた。この男児もまた、官吏の扮装をして遊んでいるのである。

2 のおもちゃの馬に乗って行進する子供たち（図 12）もまた、立身出世に関連している。馬にまたがる男児は官吏の役で、そのまわりをおつきの少年が取り巻いて練り歩いている。明代の嘉靖年間（1522-1566）頃の図様では、馬にまたがる官吏役の男児に、従者役の少年が大きな蓮の葉をさしかけて日陰をつくっていた。だが、明末清初以降、蓮の葉ではなく、日傘をさしかけるように次第に変わっていったことが指摘されている [7]。役行者の水引 2 では、蓮の葉ではなく日傘がさしかけられていることから、この品の図様は明末清初以降の図様に関連している可能性が高いだろう。

また 3 には、麒麟が男児を運んで来る「麒麟送子」（図 13）が見られる。この図様は孔子が生まれた夜に麒麟が現れ、玉書を吐き出したという伝説に基づいており、孔子のように賢く才能のある男児が生まれることへの願いが込められている。少年が片手に楽器の「笙」（発音は sheng）を、もう一方の手に「桂」（発音は gui）の枝をもっている。発音が通じることから、この図様は「連生貴子」（発音は lian-sheng-gui-zi）に通じ、男児が次々と生まれることへの願いが表されている [8]。

さらに、これらの中には仙人に扮した男児も見受けられる。1 には、蝦蟇蛙（がまがえる）の上に乗って遊ぶ男児（図 14）がいる。この男児は、道教の仙人で富の神としても信奉された劉海蟾（りゅうかいせん）のふりをして、その従者である三本足の蝦蟇蛙と戯れている [9]。

以上挙げた、琴棋書画にいそしむ男児、麒麟送子、仙人に扮する男児は、多くの唐子を描いた百子と通称される図において明末清初以降に現れたモティーフであることが指摘されている [10]。また、清朝初期の康熙年間（1662-1722）や雍正年間（1723-1735）の作のモティーフは明末の作とほぼ同じ傾向を有するが、乾隆年間（1736-1795）に変化が現れ、四文字熟語の吉祥図が飛躍的に多く用いられるようになったことも指摘されている [11]。 だが役行者山の 1・2・3 には、そのような四文字熟語に由来する

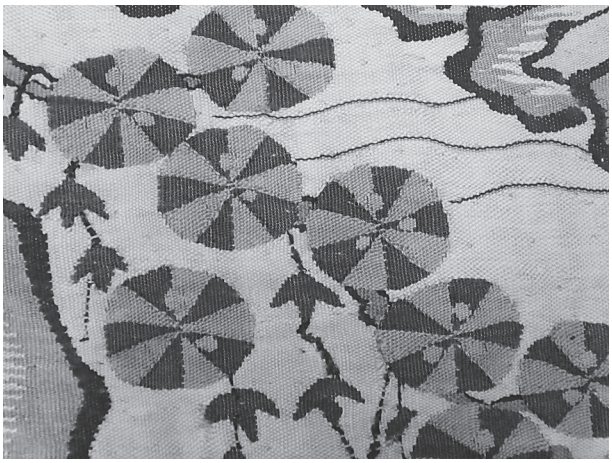

図 15　松の木の葉、水引 1

図 16　魚を捕る唐子、水引 2

図 17　樹木の葉、水引 2

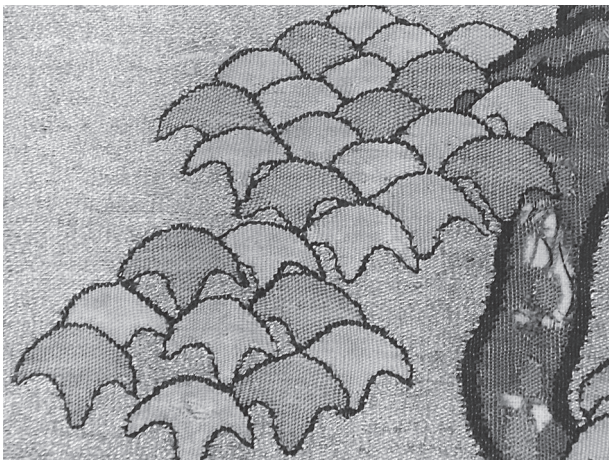

図 18　樹木の葉、水引 3

とみられるモティーフは含まれていない。そこで役行者山のこれらの図様は明末から清の雍正年間頃までの図様に関連していると見てよいだろう。

次に、これらの水引を詳細に見てゆくと、共通する表現がある事に気づく。まず、1 と 2 に共通するものをあげよう。1 には松の木（図 15）が表されており、その葉は丸を 10 分割して塗り分けたような文様で、中心に小さな楕円が 3 つ配されている。これとまったく同じ図柄が、2 において、男児の衣の文様（図 16）として用いられている。

また、1 の行進する官吏役の男児には宝傘が捧げかけられており、この傘に龍頭形の金具がついている。2 の花籠の車の長柄をよく見ると、そこに 1 の龍頭金具とよく似た金具がついている。このようなことは偶然に起きるものではないため、1・2 の下絵を描いた者はおそらく同一人物で、1・2 は組物として制作されたことは確実であろう。

さらによく見てゆくと、1 や 2 とは別に作られたと思われる 3 の中にも、1 や 2 と共通する表現があることに気づく。2 に配された樹木（図 17）の葉には、円弧を繰り返す部分とギザギザの葉先の部分が組み合わされ、それらが黒い輪郭線で強く縁取られている。3 の樹木（図 18）にも、これと同じ様式の葉の表現がみられる [12]。

なお、冒頭で述べたとおり、1 は日本的（日本製？）で、2 と 3 は中国的（中国製？）であるとする推定がかつてなされた。そこで、もしこれらが中国製であるならば不可解な表現が見られることを、ここで指摘したい。それは以下の点である。

役行者山の 3 に、補子のついた服を着る男児（図 10）がいることを先に述べたが、この男児の襟が日本の子供たちの着物のような垂領（たりくび）であることが、筆者には気にかかる。この垂領の襟は補子の下に隠れるようになっており、このような襟の形は中国の補子つきの衣としては不自然である。先に確認したように、『増補祇園会細記』によると、役行者山のこの綴織の水引は日本における綴織の確立期に制作された。祇園祭には外来製品とそれを模倣した日本の作が複数残っており、祇園祭の染織品においては、山鉾町に流入してきた外来作品を模倣して新たな織物の制作が始められることが多い。祇園祭特有のこのような状況を鑑みると、祇園祭の山鉾町

図 19　丸い果実、水引 1

図 20　丸い果実と五弁花、澤瀉鉾（日本製）

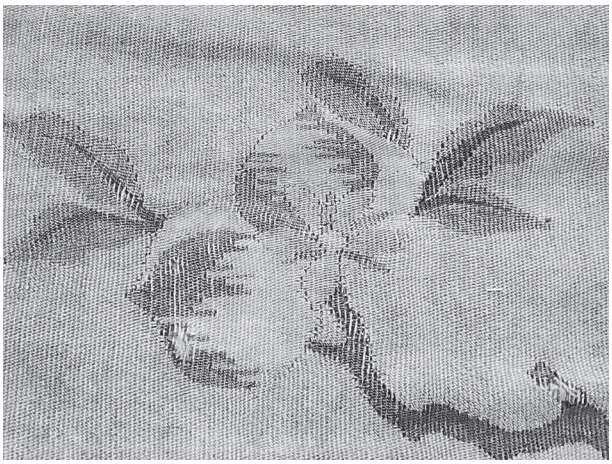

図 21　桃と五弁花、橋弁慶山（中国製）

にすでに流入していた中国製の唐子嬉遊図の綴織を模倣する形で、役行者山の綴織が制作された可能性が高い。そこで、祇園祭に伝来し、史料などから中国製であることが裏付けられる唐子嬉遊図の綴織掛物を調査したところ、補子のついた衣はすべて丸領（まるくび　丸い形の襟）で表されており、役行者山の 3 とは襟の形が異なっている [13]。

さらに、役行者山の水引 1 には丸い果実（図 19）が表されているが、この果実の形も不可解である。これと同じ丸い果実は、今宮祭の澤瀉鉾（おもだかほこ）に伝来する唐子嬉遊図の綴織の吹散（ふきちり）[14] にも見受けられる。澤瀉鉾の作は織り込まれている銘文によって、文政 4 年（1821）に桜井基近によって制作されたことがわかる日本製である。役行者山の 1（図 19）と澤瀉鉾の果実（図 20）は整った正円で、まるでボールのように見える。これに対して、中国製であることが明らかな橋弁慶山の唐子嬉遊図の綴織には、澤瀉鉾にみられるものと同じ 5 弁花が配され、その果実（図 21）は先端が少しとがっており、桃であることがよくわかる [15]。このように比較してゆくと、役行者山の 1 や澤瀉鉾の丸い果実は、桃の写し崩れと見て良いであろう。中国で形成された子孫繁栄を願う唐子嬉遊図には、三千年に一度開花して結実する蟠桃が不老長寿の象徴としてしばしば織り込まれる。だが、役行者山の 1 や澤瀉鉾の織手は、中国のこのような伝統表現を理解できなかったようである。

また、役行者山の 3 の「画」の主題の画冊に、弓矢の的のような丸い図様が表されているが、これは中国の道教で陰陽を表すのに用いられた太極図の写し崩れではないかと思われる。

このように、1・2・3 には、もし中国の職人が織ったとするならば不可解であるが、日本の職人が織ったならば腑に落ちるような写し崩れが複数含まれていることは、特に留意すべきであろう。

3　綴織の材質と技法

役行者山のこれらの水引を肉眼で見たところ、その綴織の織技の上で、まず目につくことがある。岩の皴法を表すために、同じような色面の切り返しが 1・2・3 に共通して多用されている。水引 1 の岩肌の表現として、のこぎりの歯のような色面の切り替え（図 22）が多く用いられている。これは同じような長さの複数の緯糸を交互に折り返すことにより現れるもので、織り方の一つの特徴といえる。2 でも同様な鋸歯状の切り替え（図 23）が多用されている。3 では白と紺の組み合わせで多くの岩が織り出されているため、岩の鋸歯状の切り替え（図 24）がさらに際立っている。岩の皴法に、鋸歯状の切り替えをこのように単調に繰り返す例は、日本製の綴織に多く見いだすことができる [16]。その一例として澤瀉鉾に伝来する、先ほどあげた日本製の唐子嬉遊図の綴織をあげたい。この綴織では、唐子がかくれんぼをする太湖石などに、同様の鋸歯状の切り替え（図 25）が多用されている。これに対して、橋弁慶山に伝来する中国製の唐子嬉遊図

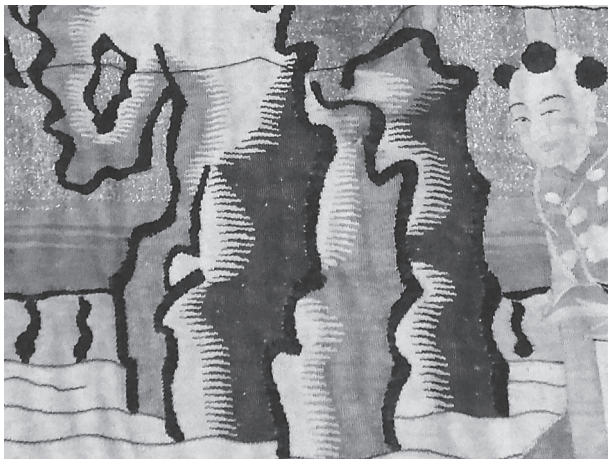

図 22　岩の皺法の鋸歯状の切り替え、水引 1

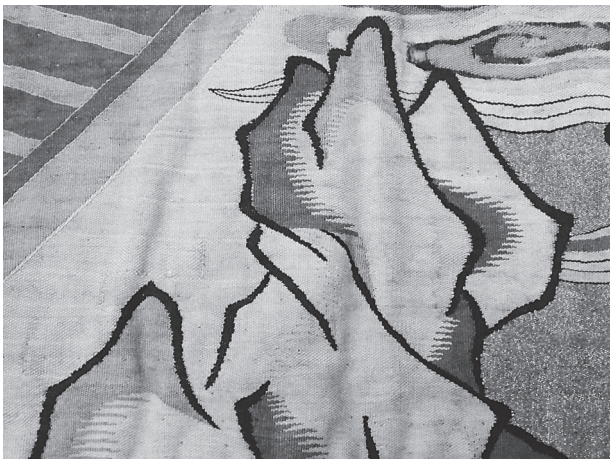

図 23　岩の皺法の鋸歯状の切り替え、水引 2

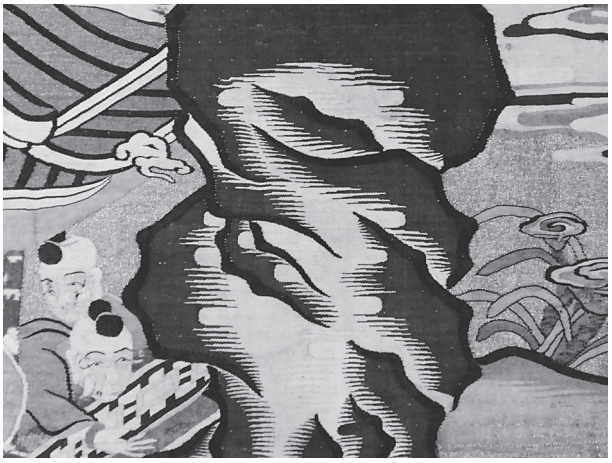

図 24　岩の皺法の鋸歯状の切り替え、水引 3

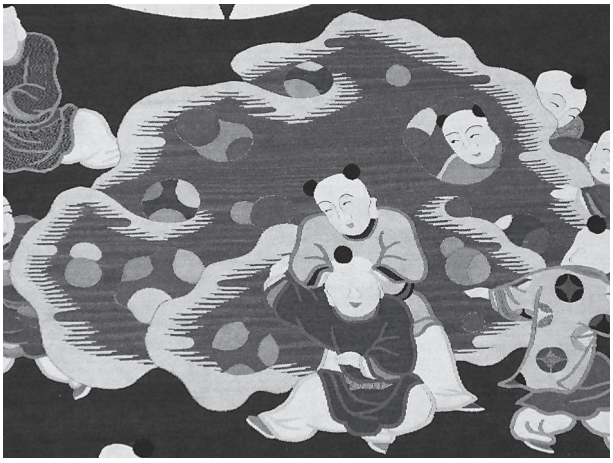

図 25　岩の皺法の鋸歯状の切り替え、澤瀉鉾（日本製）

図 26　岩の皺法の有機的切り替え、橋弁慶山（中国製）

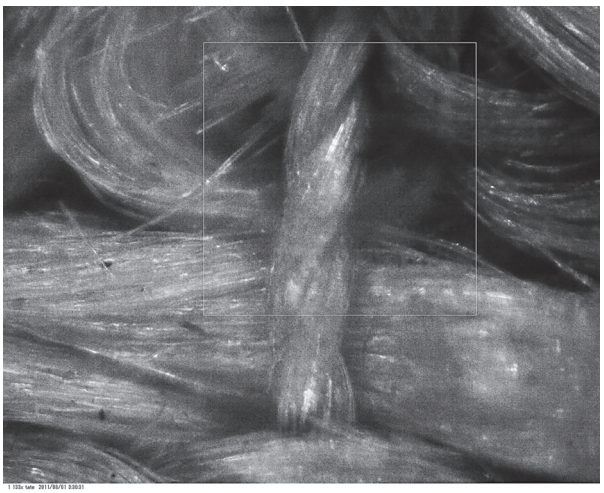

図 27　経糸、水引 1、画面内の細い枠線は 1mm x 1mm（以下同様）

表１　役行者山の唐子嬉遊図綴織水引の糸と織技

所蔵先	作品名称	経糸				緯糸（色糸）				緯糸（色糸以外）		その他
		繊維	撚り	色彩	密度/cm	繊維	撚り	色彩	密度/cm	金属糸	孔雀糸	
役行者山	唐子嬉遊図綴織水引-1	絹	s-2z	白	16	絹	s-2z s-2z s-2z s-2z s-2z s-2z s-2z	白 薄茶 赤 緑 青 茶 黒	28-54	撚金糸 （芯糸：絹、無-s弱、白） （金糸：紙胎、赤茶漆下地、ｚ巻、金箔は黄味が強く光沢が強い） 撚金糸 （芯糸：絹、無-z弱、薄茶） （金糸：紙胎、漆下地の色は不明、ｚ巻、金箔は白味が強かったが、現在は茶系に変色）		・はつり ・変色退色が著しい
役行者山	唐子嬉遊図綴織水引-2	絹	s-2z	白	16	絹	s-2z s-2z s-2z s-2z s-2z s-2z s-2z s-2z	白 薄茶2色 黄 赤 緑4色 青4色 茶 黒	32-60	撚金糸 （芯糸：絹、z弱、白） （金糸：紙胎、漆下地の色は不明、ｚ巻、金箔は黄味が強い） 撚金糸 （芯糸：絹、z弱、白） （金糸：紙胎、漆下地の色は不明、ｚ巻、金箔は茶味・灰味が強く、剥落が多い）		・はつり ・変色退色が著しい ・2本をひきそろえて同口に打込み s灰色1本とs黒1本 s白1本とｓ黒1本
役行者山	唐子嬉遊図綴織水引-3	絹	s-2z	白	16	絹	s-2z s-2z s-2z s-2z s-2z s-2z s-2z s-2z	白 薄茶 黄 赤 緑2色 青2色 茶3色 黒	36-44	撚金糸 （芯糸：絹、無-z、白） （金糸：紙胎、赤茶漆下地、ｚ巻、金箔は黄味が強い） 撚金糸 （芯糸：絹、s-2z、茶） （金糸：紙胎、薄茶漆下地、ｚ巻、金箔は当初は白味が強かったが、紫茶に変色）	孔雀糸 （芯糸：絹、s-2?z、ベージュ） 孔雀羽をs巻	・はつり ・変色退色が著しい 紅地が薄茶に変色 ・2本をひきそろえて同口に打込み s-2z白1本とs紺1本 s-2z（通常の撚）白1本とs茶1本 s-2z（強撚）白1本とｓ茶1本

註：経糸は便宜上 s-2z と簡略に表記したが、実際の下撚りは無撚から弱いｓ撚になっている

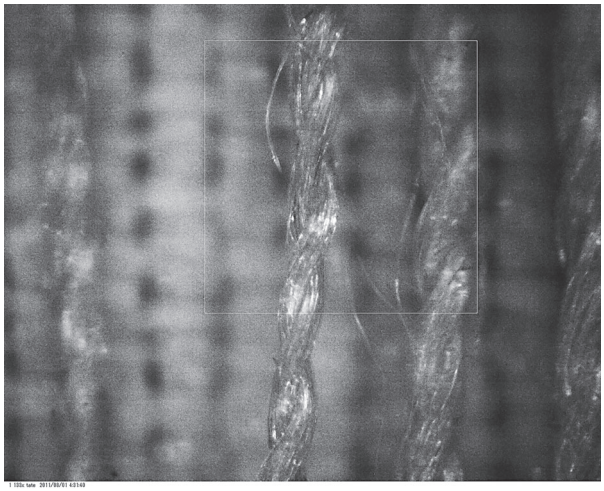

図 28　経糸、水引 2

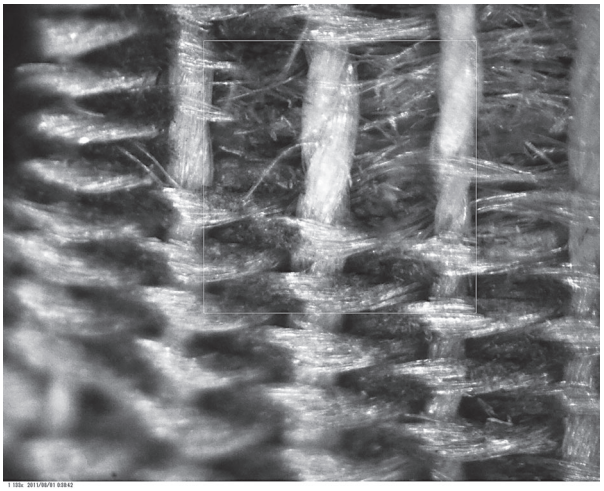

図 29　経糸、水引 3

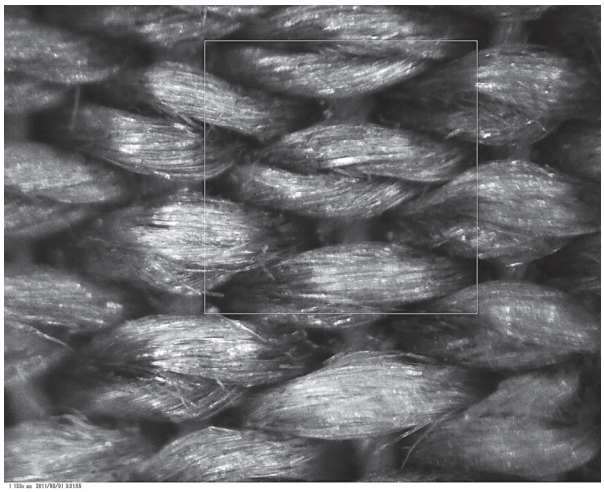

図 30　緯糸、水引 1

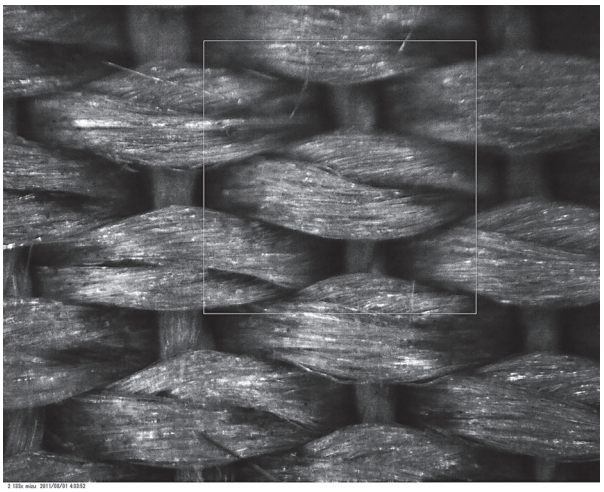

図 31　緯糸、水引 2

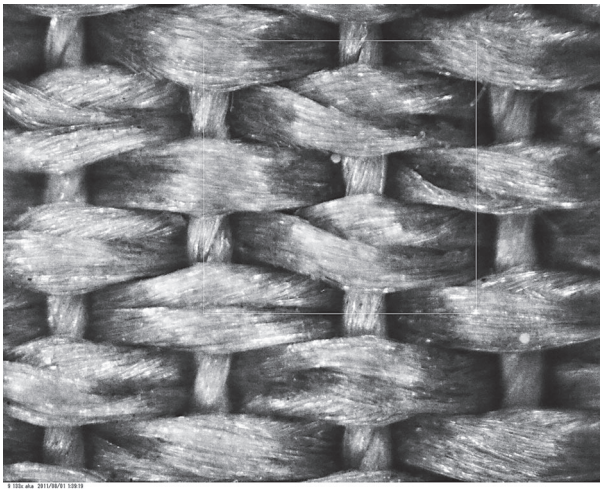

図 32　緯糸、水引 3

の綴織では、単調に繰り返す鋸歯状の切り替えが岩の皴法に用いられることはあるものの、それはさほど多くない。それよりも、さまざまな有機的な形状の切り替え（図 26）が多く用いられており、その切替線は複雑に入り組むものが大半である[17]。

さらに、顕微鏡を用いて役行者山の 1・2・3 の材質を調べたところ、表 1 のような結果となった。これらの経糸は白い絹で、1・2・3 はともに経糸の撚り方が同じである（図 27、28、29）。それは s-2z（s 方向に下撚りをかけた糸を、2 本合わせて z 方向に上撚りをかけたもの）で、表 1 では便宜上 s-2z と簡略に表記したが、実際の下撚りは極めてゆるく、撚られていないように見える部分も多い。

文様を織り出す緯糸には様々な色が用いられているが、やはりすべて絹で、1・2・3 ともに経糸と同じつくり（s-2z）になっている（図 30、31、32）。

また、織の密度を調べると、1・2・3 は経糸の織密度がすべて同じで、1cm に 16 本織り込まれている。緯糸はさまざまな色や太さの糸が用いられているため密度に幅があるが、1 の場合は 1cm に 28-54 本、2 の場合は 32-60 本、3 の場合は 36-44 本打ち込まれていることを確認した。

このように、1・2・3 ともに経糸と緯糸の撚り方向が同じで、さらに経糸の密度も同じである。この結果からは、1・2・3 の織場が別の国であったり別の工房であったりすることを顕著に示唆する要素は見受けられない。

なお、2 と 3 には、色違いの 2 本の緯糸を引き揃えて同口に打ち込んだ部分があり、この部分は遠くから見ると、あたかも 2 色の色が混ざったかのような色彩効果を醸し出している。そして、2 と 3 を良く比べてみると、打ち込まれている糸のつくりが異なっていることに気づく。2 には二つの糸使いがみられる。一つは s 撚の白と s 撚の黒を打ち込むもの、もう一つは s 撚の灰色と s 撚の黒を打ち込むもの（図 33）である。3 には、三つの糸使いが用いられている。s-2z の白と s 撚の紺を打ち込むもの（図 34）、s-2z の白（中程度の撚）と s 撚の茶を打ち込むもの、s-2z の白（強い撚り）と s 撚の茶を打ち込むものである。そのため、2 と 3 は織手が異なる可能性があるかもしれない。

次に金属糸だが、1・2・3 にはそれぞれ 2 種類の金属糸が用いられている。これらはみな絹の芯糸の周りに金属糸を巻きつけたものである。金属糸の胎は紙で、接着剤を兼ねた漆の下地の上に金属の箔が貼られている。1 種の金箔は光沢が強く、黄色味が強い（図 35、36、37）。もう 1 種は金属の剥落が多く、光沢はあまりなく、変色して茶色味や紫味が強くなっている[18]。金属糸に関しては、糸を採取して科学分析にかけてデータを集積することが望まれる。だが、実際に糸の採取が許可されることは稀であり、金属糸の顕微鏡観察のみで産地を同定することは現在のところ難しい。

さらに、1 と 2 には見られないが、3 には孔雀の羽根を巻きつけた糸（図 38）が用いられている。この種の糸は

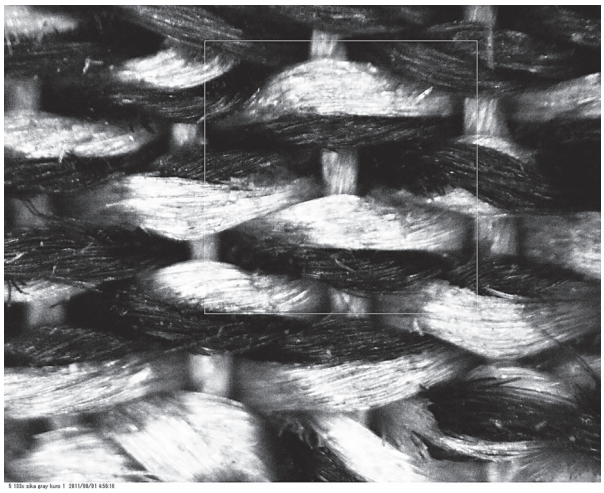

図 33　同口に打ち込まれた 2 色の緯糸、水引 2

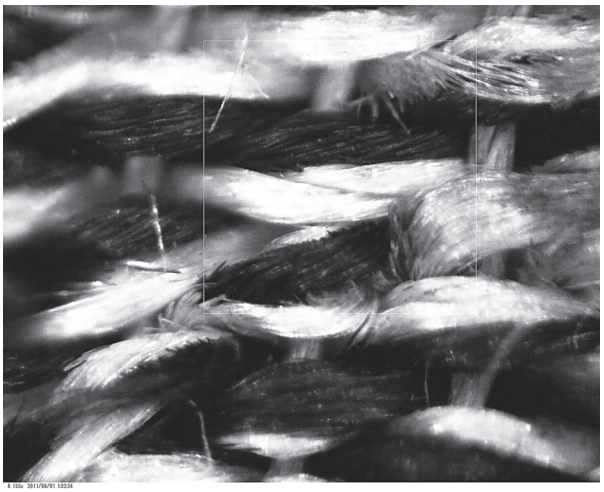

図 34　同口に打ち込まれた 2 色の緯糸、水引 3

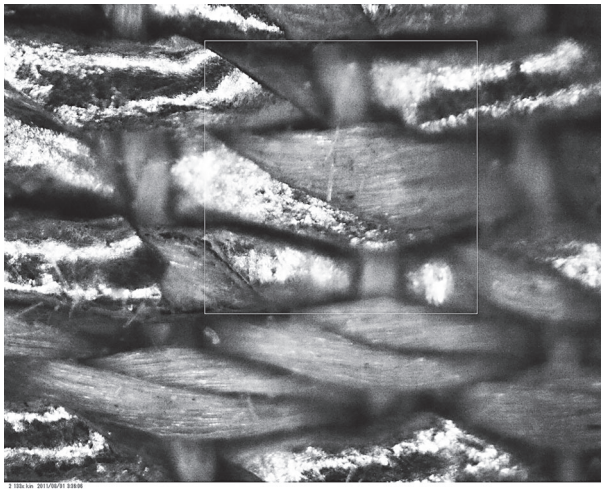

図 35　金属糸、水引 1

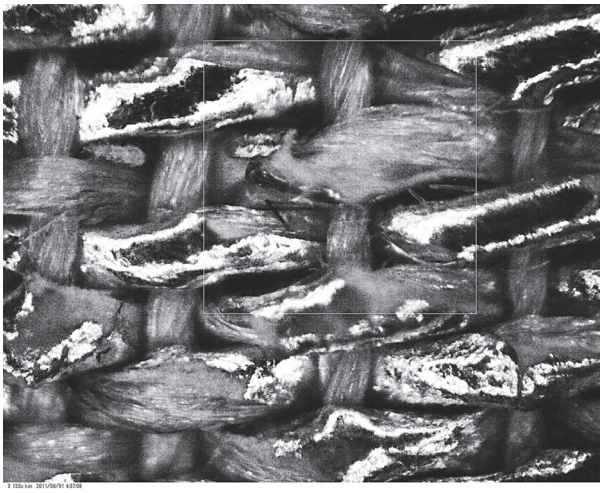

図 36　金属糸、水引 2

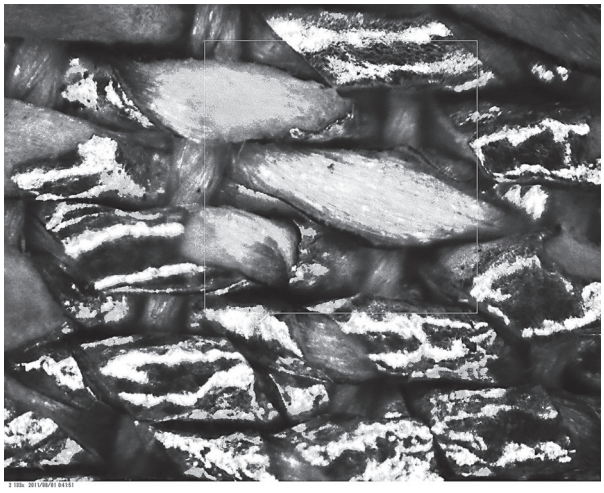

図 37　金属糸、水引 3

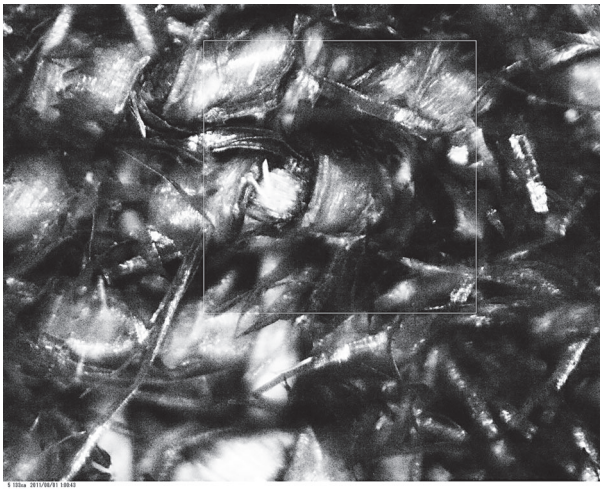

図 38　孔雀の糸、水引 3

中国でも日本でも用いられたため、これによって産地を特定することはできないが、3の織手が1・2とは異なる可能性は、この糸づかいからもうかがわれる。

結論

以上、1・2・3の水引にみられるモティーフ、表現様式、織物の材質、技法を検討してきた。そこで最後にまとめとして、これらの調査結果が指し示すことをとりまとめたい。

役行者山の唐子嬉遊図水引は現在4枚から構成されているが、この4枚の水引は当初から一つの組物であったのではなく、後世に仕立て直されて現在の形になっている。そのうちの一枚（北の水引）は、後世に加えられた裂から構成されており、当初の作である可能性が高いのは、1（西の水引）、2（東の水引）、3（南の水引）の計3枚である。

ここで、冒頭にあげた3つの「問い」に関して考えを巡らせてみたい。まず第一の問いは、1・2・3のうち当初から組物だったのは、いったいどれとどれなのだろうかということである。

文様表現を検討したところ、1と2に共通するものとして、以下があることが判明した。1の松の木の様式化された葉の表現と、2の男児の衣の文様が同じであり、1の宝傘の金具と、2の車の長柄の金具も同じ龍頭形である。そして1・2の綴織は、ともに糸の材質、撚り方、経糸の織密度が同じである。文様表現や材質などの特徴が一致することから、1・2は当初から一つの組物として制作されたものであることは疑いの余地がない。

また、3が1や2と異なる点も浮かび上がってきた。2と3では琴棋書画のうち「画」の主題が重複しており、当初2と3は同じ組み物ではなかったものと思われる。2と3には色違いの2本の緯糸を同口に打ち込む部分があるが、その糸使いが2と3では異なっている。そして、1と2には見られない孔雀の羽を巻きつけた糸が、3のみに用いられている。これらのことから、3は1や2とは異なる織手によって作られた可能性がうかがわれる。

次に第二の問いであるが、いったいこれらの水引は日本製なのであろうか、中国製なのであろうか。この問いに対しては、中国の職人が制作したとみると不可解だが、日本の職人が制作したならば納得がゆくような写し崩れがみられることに留意する必要があろう。水引3の官吏役の男児の衣は襟が垂領で、その襟は中国の補子つきの衣のものとしては不自然な形に表されている。また、1の丸い果実は道教に関連する桃の写し崩れで、同じ写し崩れが日本製の唐子嬉遊図綴織にも確認できる。中国の服飾や道教の象徴などを十分に解せない日本の職人の手によるものであるならば、このような表現や写し崩れはあり得よう。

さらに1・2・3では、同じような長さの緯糸を繰り返し単調に折り返す方法で、岩の皴法が表されている。そしてこのような織り方の特徴は、日本製であることが明らかな綴織に多くみられる。文様や技法におけるこれらの特徴を総合的に勘案すると、1・2・3ともに日本製とみるのが妥当であろう。なお、2と3の樹木に同じ表現様式の葉が見つかったが、2と3は生産国が同じで、同じ手本を参照したか、あるいは工房が近い関係にあるなどの理由によって、このような類似が生じたのかも知れない。

以上まとめたように、調査結果は1・2・3が日本で作られたことを示唆している。それならば、祇園祭の諸状況を勘案すれば、これらには中国製の手本があったはずである。文様の調査をした結果、役行者山の水引には、唐子嬉遊図において明末清初以降に現れた琴棋書画にいそしむ男児、麒麟送子、仙人に扮する男児などが含まれており、乾隆年間以降に現れるモティーフは含まれていないことが明らかになった。そのため、これらの品の手本になったのは、明末から清の雍正年間にかけて中国で制作された唐子嬉遊図と推察される。

最後の第三の問いは、西山勘七の作を判別できるか否かということである。先述したように『増補祇園会細記』によると、文化8年6月までに西山勘七によって織り出された唐子嬉遊図の綴織の水引が、文化11年の時点で役行者山にあったことは確実である。図様表現や材質・技法の特徴から、1・2・3ともに日本製であると推察されるため、これら3作はともに西山勘七の作の可能性がある。だが、以上のように一次史料と現物作品を調べた限りでは、1・2が西山作なのか、3が西山作なのかを確定する材料は十分に揃わなかった。ただし、これらの品に勘七が関与したことを否定する材料が見出せなかったことも事実である。そこで現時点においては、これら3作を西山勘七に関連する作としておきたい。もし将来、西山勘七作であることが明らかな別の品が現れたら、その時点で改めて1・2・3を比較検証したい。そのような作が今後現れることを期待して、この点は今後の課題としておきたい。

制作年代と織手の名前がわかる19世紀初頭の綴織はごく少数しかない。『増補祇園会細記』によって制作者の情報が如実にわかる役行者山の水引は、日本の染織史において極めて貴重な作品であることが、ここで改めて確認された。生き生きとした表現に満ちあふれ、細部まで精緻に織り出された役行者山のこれらの水引は、日本の綴織の成立過程を指し示す極めて重要な作である。

註

1　北側の水引に含まれる綴織の裂片のうち、二つは比較的大きく、唐子が表されている。だが、その表現様式は1・2・3とは異なっている。それ以外の裂は大変小さく、これらだけでは図様の判断がつかない。

2　大田英蔵氏は、前面に配される水引A（本論でいうところの3）と、向かって右側に配される水引B（本論の2）は唐様であり、左側に配される水引（本論の1）は和様であるとし、左側に配される水引（本論の1）が西川勘七の作ではないかと推定された。（大田英蔵等編『祇園祭染織名品集』1巻、云艸堂、1970、p.16、図28；大田英蔵『大田英蔵染織史著作集』下巻、文化出版局、1986、p.188、p.221の図23A・B）。

3　『増補祇園会細記』下、役行者山の鋲附の条、役行者山蔵。

4　吉田雅子「一次史料から見る日本製の江戸時代の綴織」『京都市立芸術大学美術学部研究紀要』Vol.62、2018、p.32を参照。

5　Ann Wicks, *Children in Chinese Art*, University of Hawai'i Press, 2002, pp.72-74.

6　八宝は、宝珠、古銭、方勝、玉磬、犀角、銀錠、如意、珊瑚、書、画、祥雲などのなかから8つを選んで用いる吉祥図案。左漢中『中国吉祥図像大観』湖南美術出版社、1998, p.332。水引1では、碁を打つ男児の一人がやはり官吏の衣を着用している。

7　Ann Wicks, op.cit., pp.61, 72.

8　Ibid., p.74.

9　劉海蟾は、遼の時代の人で官職を辞して道士となり、呂洞賓から金丹の秘訣を授けられて各地で神異を表したと伝えられる（増田秀光編『中国の神々』学習研究社、2007、p.153；窪徳忠『道教の神々』平河出版社、1986、p.179）。

10　Ann Wicks, op.cit., pp.72-74.

11　Ibid., pp.74-79.

12　このような単純化された形の葉は、黒主山の唐子嬉遊図綴織（中国製）や澤瀉鉾の唐子嬉遊図綴織（日本製）にもみられるが、それらにはこのような黒く目立つ輪郭線は入っておらず、葉の形ももう少し丸みを帯びている。2と3の葉の表現は類似性が高いとみてよいだろう。

13　中国製であることが史料などから裏付けられる祇園祭の黒主山と橋弁慶山、及び大津祭の源氏山と西王母山に伝来する唐子嬉遊図綴織掛物を調べたところ、補子の衣はすべて丸領であった。

14　今宮祭は、京都の今宮神社の祭礼である。吹散とは、山鉾などの一番上につける装飾品で、生地が細長く風になびくような形状をしている。

15　橋弁慶山の唐子嬉遊図の綴織は、現在は横長の水引の形状である。しかし、この作は裂片を接ぎ合わせたものであり、もとは縦長の画面の品であったものを横長の水引に改変したものであることが知られている（吉田孝次郎、梶谷宣子他『祇園祭山鉾懸装品調査報告書　渡来染織品の部』祇園祭山鉾連合会、2012、pp.132-133）。祇園祭には、貴重な中国製品を裁断して日本の山鉾の形状に合うように仕立て直した掛物が多く伝来している。もしこの作が日本製であるならば、当初から一枚ものとして橋弁慶山の水引の形状に織り出したはずである。この断片の接ぎ合わせ状況から、この綴織は中国の品の改変作であることは疑いの余地がない。

16　本文にあげた澤瀉鉾の唐子嬉遊図綴織の他、祇園祭の占出山の日本三景と富士の綴織でも、岩の皴法の部分に鋸歯状の切り替えが多用されている（吉田孝次郎、藤井健三他『祇園祭山鉾懸装品調査報告書　国内染織品の部』祇園祭山鉾連合会、2014、pp.62-63）。

17　単調に繰り返す鋸歯状の切り替えが岩の皴法に用いられることはあるものの、それはさほど多くなく、それよりも有機的な形状の切り替えが多いという点は、中国製であることが明らかな祇園祭の唐子嬉遊図綴織において共通に見い出すことができる。たとえば、鈴鹿山の長寿福禄寿前掛・胴掛にも、岩の皴法の部分に有機的な切り替えが多用されている（吉田孝次郎、梶谷宣子他、前掲書、2012、pp.115-118）。

18　水引1と3に用いられている金属糸は、白味が強い部分が残っており、当初からみるとかなり変色していることがうかがわれる。

【図版出典】

下記以外の挿図は、筆者が撮影した。

図1　電通京都支社編『祇園祭2017』電通京都支社、2017、p.53。

図2　吉田孝次郎他『祇園祭山鉾懸装品調査報告書　国内染織品の部』祇園祭山鉾連合会、2014、p.151。

図3　同上

図4　同上

図20　西陣五百年記念事業協議会編『西陣美と伝統』西陣五百年記念事業協議会、1969、p.155, 図47。

図25　同上

【謝辞】

本研究において、以下の方々から御助言、御協力、御厚情を賜りました。ここに記して感謝の意を表します。林壽一様、吉田孝次郎先生、藤井健三先生、那須明夫様、垣見秀彦様、長谷幹雄様、山口敬一様、上田公代様、本郷勝巳様、村上忠喜先生、安井雅恵様、山下絵美様、福持昌之様、今中崇文様、橋本章様、松中博様、Ms. Sally Yu Leung、徐文躍先生。

【附記】

本研究はJSPS日本学術振興会令和3年度科学研究費、基盤研究（c）課題番号17K02319「日本における綴織の再興と展開に関する基礎研究」の助成を受けて実施した。